

## 河邊貞吉ていきち師の生涯を辿る

我が道を往く 祈りと伝道一筋に



昭和14年2月撮影

編集部（文責 柿崎眞吾）

文中敬称略

### はじめに

今、吹田市千里山西五丁目二六番に、河邊貞吉記念宗教法人数立千里山基督教会という切妻屋根の瀟洒な建物の教会を遠くからでも見ることが出来る。

昔の住宅地の北側の丘、つまり千里山駅がまだ終点だった頃の車庫から西の方を見上げた雑木林の丘と言うと解りやすい。

福音伝道に生涯を捧げた貞吉は、モーセがカナンの地を目前に召天したごとく、この丘にまだなんの建物も建っていないかった昭和二八年一月九〇歳で召されている。貞吉が知っているのは息子夫婦が家でやってき

た日曜学校である。昭和二三年に家の教会をはじめた頃はもう視力の衰えが進んでいたと思われる。

昭和初期の千里山には、国際的に秀れたアスリートやアーティストが居られたのをご存知の方は多いと思うが、エヴァンジェリスト（伝道者）の河邊貞吉が住んでおられたのをご存知でしょうか。

日本の宗教界で、十九世紀の明治から大正・昭和の三代にかけて、米国と日本で傑出した働きをされた異色の伝道者が、晩年赤壁薬局の角を上がって四つ角に出るまでの左側に柳子夫人と住んでおられた。住宅の人は「河邊のオジイサンとオバアサン」と呼んでいた。ゆりかごから天国まで

戦後間もない昭和二三年に、ご息夫婦の代になつていた河邊家が大決断のもとに、人の住んでいないひと山四五〇〇坪が売りに出たのを取得した。千里山の地に遠大な宗教学業を実現しようと長年理想に燃えていた矢先の出会いからであった。

満襲みつひらと順子は、取得した一帯を「シオンの丘」と名づけた（シオンは聖都エルサレムの東丘、のちに聖都そのものを指す）。そして「ゆりかごから天国まで」の理念を掲げて、産院、幼稚園、教会、学生ホーム、納骨堂等の施設を何

年もかけて順次造ったが、その中核となるのは、なんと言つても教会である。その教会名の頭に父貞吉の個人名を冠し、河邊貞吉記念としたのは、これらの施設は、福音伝道のための宗教事業であり、その理念は、「貞吉の生涯そのものの中にある」と考えていたからだろう。

次稿の「日曜学校とナオミ幼稚園」も、貞吉の嗣業であるなら、読者のために日本の宗教界の偉大な先達をご紹介しておくことが、シオンの丘の全てを知るにも少しはお役に立つと考えたからである。

筆者がこの伝道の巨人を描くの力不足なのは承知しており、貞吉が他の先達とどう違うか、その一端を述べることでお赦しただけのことを願っている。

#### 貞吉の生地・環境・産業

河邊貞吉は元治元年（一八六四年）六月、父清三郎・母しほのもとで、筑前国糟屋郡山田村（現在の福岡県糟屋郡久山町大字山田）に生まれた。明治天皇の先帝孝明天皇は在位二〇年間で六つの元号（弘化・安政・萬延・文久・元治・慶応）を使った。千里山会の戦前卒会員の祖父母の生年には、これらの中の元号がよく見られたものである。

#### 明治の基督教事情

##### 禁教高札撤廃とその後

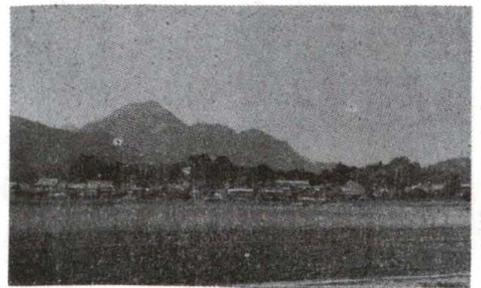
明治新政府は、幕府の禁教政策を踏襲して、明治三年（一八七〇年）あらためてキリシタン禁制を打ち出し、浦上信徒三千有余人への大弾圧を加え、これが外交問題に発展していた。

明治四年から六年にかけて欧米を巡行した岩倉全権一行は、各国からの非難を受けて驚き、直ちに本国の明治政府に高札の取り下げを進言し、その年にキリシタン禁制は解かれました。外圧に弱い日本がもうここで覗いていたのが解ります。

長いキリシタン時代のカトリックによる宣教に替わって、日本にもプロテスタントが登場してこれまで行われなかった聖書の全訳を米人へボンとブラウンの両宣教師の協力を得て、新約が明治十二年、旧約が同二〇年に完成、へボンはまた和英辞書も編纂し日本に貢献した。

禁教高札撤廃後の教勢の伸展は目覚ましく、プロテスタントの教派づくりの自由性から、札幌・横浜・熊本で各地ごとに宣教師の指導で信仰による連帯が生ま

山田村は、博多の東部に位置する博多湾にほど近い東側が丘陵地帯で、当時の記録には縄文土器や石器も出てきた、人口五二八人のうち五〇五人が農業従事者で、優良な産米中心の村落であった。また櫛（はぜ・生蠟の原料）のよく獲れるところで、生蠟は米作に加えて大きな収入源になっていたと思われる。これは、後に大阪での商人としての成功に関連がある。



ここで貞吉のご生涯をお話する前に、明治の基督教事情の中で、代表的な先達と言われてきた方々とは、何処が違うかを述べることで、貞吉が傑出した異色の伝道者であることを理解していただくように考えました。暫くのご辛抱をお願い申し上げます。

れ、人呼んでバンドと称して、札幌バンドには新渡戸稲造・内村鑑三らが、横浜バンドには植村正久・井深梶之助らが、熊本バンドには海老名弾正・徳富蘇峰らがそれぞれ宣教師の感化を受けて成長し、三バンドはその後の日本の宗教界・教育界に大きな影響を与えることになる。

宣教師による基督教の教えが、開国とともに相次いで移入されたもろもろの西洋近代思想と並んで、欧米の近代社会形成の精神的基礎になっていること、哲学・文学・美術・音楽等も基督教の教えを知らずして理解できないし、また日本人の国際性も危ういことを学んだ。

##### 武士階級の知的青年達の忠誠心

旧約聖書の説く創造主と御子イエス・キリストによる人類の罪からの救済と、神の前の万人平等の福音を宣布する担い手達には、新時代の指導原理を「天父」とその「御子」に求めて、日本の青年を教化することこそ自らに課せられた任務との使命感が、彼等の多くに共通して見られた入信動機であった。

三バンドの人達の多数が「武士階級出身の青年知識層」であったことは特筆に値する。失われた「主君」

への献身のエネルギーは、そのベクトルが創造主である「天主」愛称「天父」へ向けられたのは見逃せない。主流となってプロテスタント基督教界をリードした秀れた人達の多くは、父親の代までは藩から扶持米を貰っていた士分(武士の身分、明治の戸籍制度後は士族)の子弟であった。戦国時代の武士(農兵)とは違う。彼等は当時の高い教育を受けた知的エリート達でもあったから、東京中心、都市中心の知識階級への宣教の浸透は図れたが、下町の町民や地方の農民、また下層社会の人々には届きにくかった。基督教による学校ができて、信仰を目指すよりも教養文化の一助として集まる子女が多かった。

本題の河邊貞吉に戻る

貞吉の出自は武士階級の子弟ではなく平民である。

冒頭で述べた通り、貞吉は農村青年である。両親は熱心な仏教徒で、貞吉は幼少の頃から教理・経文を教えられ、道徳は村の漢学塾に入って学び、宗教倫理に関心の強い少年として育った。

貞吉は知的エリートでなく、農村の独学の徒である。

学校教育は日本でも、後年米国でも受けていない。

を夢みるようになった。米国は非常に富める黄金の國で、たくさんのお金が起生していることを耳にし、当時ようやく渡米熱も盛んになるうとしていた頃で、大胆にも米国に渡る決意をした」

と述べている。そして英語の猛勉強に励み、大阪の永田氏と結び、在米日本人へ一手に日本茶を売り込む貿易商人として、明治十八年(一八八五年)十月、望み通り渡米の途に着いたのである。二二歳の時であった。

大阪の商人から米國貿易商へ転進したのである。「商売は僥倖にも順調に伸展し身分に過ぎた利益を得ることができた」

と述懐している。相当大的な金を動かすようになっていたのは事実だろう。本人は僥倖と言っているが、稀に見る商才の持ち主であったことが窺われる。決断力があり、九州男児らしい生一本な明るさ、親譲りの宗教倫理性は相手を騙すことのない誠実さを生み、そこから出てくる押し強さや、決してへこたれない仕事ぶりなどが察しられ、商人としての成功の要件がいくつも見えてくる。

後年の基督教伝道においても、宣教資金の優れた調達力に生きているのはつきり感じるのである。

少年になって九州では西南戦争が起こり、当時まだ世情騒然たる頃で、貞吉はこのまま伝来の土地にしがみついて生涯を終ることを良しとせず、

「男子志を立てて郷里を出る。人間至る所に青山ありとの意気に燃え、満々たる野心を抱いて上阪す」と述懐している。明治十三年貞吉十七歳の時であった。

当時商いの中心は東京ではなく大阪であった。大阪へ出て商人として成功し、さらに米國を目指す。

ここで、生涯刎頸の友となる、ビジネスパートナー永田保治郎(後年義兄弟)と出会うのは神の引き合わせか。千里山教会の森優元牧師の話の中に、貞吉は「米と蠟燭を商いしていた」記事があるが、久山町史の記事とも符号する。電気のない時代だから蠟燭は米とともに必需品で、郷里と結んで生蠟を仕入れて蠟燭に加工し、主力商品の良質米と併せて商いをしていたと思われる。この頃貞吉は、後年一粒の粉が多くの信徒を生み出し、一本の蠟燭が身体を燃やして信仰の光を投げける伝道者になるとは、夢にも思っていなかっただろう。

「商売は図に当たり、多少の富を得ることができた。

(中略)そして富を得れば得るほど欲望はますます深まり、もつともつと多くの金を儲けたいと一攫千金

英語の習得を目的に教会の門をくぐる

その頃は、自分の商売の成功のため英語習得の便宜を得るのに基督教教会に通い、求道者のように牧師や信者達と交わっていた。米国に渡って大儲けし錦を飾って帰国することが夢であったし、その夢は着々実現しつつあった。

それが牧師から教えを受けるうちに、ふと内省することが多くなり、自分には、神なく、救い主なく、その存在を教えられて知りはじめると、金儲けの喜びとはまた別の喜びで満たされ、身体の中に溢れんばかりのものを感じた。

神と人の前で基督教信者となることを公表する

明治二〇年十一月の最終木曜日の感謝デーに、明確に創造主と救済主の父と子を、聖霊によって知ることができた貞吉は、翌十二月二五日サンフランシスコ・メソジスト教会で、聖徳の誉れ高いハリス監督より、洗礼を受け、教会の人となる。

受洗以来ますます深く救いの恵みの中に歓喜と感謝の日々を送り、会う人ごとに、また自宅に来る人々に、自分を証して救いの道を伝えた。

商売の成功者になりつつあった貞吉は、渡米の目的

も着々実現し、百万長者(?)になるのも夢ではない。真面目に働いて得た富は神の恩寵の徴として物質的栄華は米国では尊敬される。貞吉の場合、渡米以来の商売の成功は、日本や米国のビジネスパートナーに恵まれたことによるもので、神の歩ましめる業と思ひ、自分の努力才覚によるものとは思わない、稀有と言つてよい「恩寵思考の人」であつた。

故郷へ錦を飾るのに、富のほかに、基督教信者というもう一つの錦を携えて帰ることに、当時はまだ内心なんの躊躇もない喜びがあつたと思う。

ここまでは熱心な信者であればあり得たことである。伝道者への変身は神の方からやつてきた。

明治二二年八月七日、サンフランシスコのこの日を、貞吉は生涯、聖霊降臨(ペンテコステ)の日とも、信仰復興(リバイバル)の日とも言つてゐる。二六歳にして貿易商人たる身を捨て、基督教伝道者に変身した。

ただし、貞吉が「神と富とに兼ね仕えることはできない」という聖書の言葉を守つたということではない。富は神から託されたもので、持つことを罪惡視したものではないからである。

このとき貞吉は、神の声を聞いてあまりに感動的に

も難解な理論づけによるものではなく、単純に聖書の言をそのまま信じ、完全に神の靈感によるものとした。イエスの復活はもとより再臨も教理の中心に据えた。純福音主義をとり、大衆伝道に馳せるが個人伝道も重んじ、その初期からの成果の大きさは次の一事からも窺える。

貞吉は明治二五年九月までの三年間、サンフランシスコ日本人メソジスト教会新任牧師の任に当たる。



牧師としての初仕事は、混沌たる社交場のような名ばかりの教会を一旦解散し、貞吉によつて純福音主義による信仰復興を受けた四〇〇名の新信徒による教会に

見事に再建した。その功績は大きく、名声は拡がり、その火は種火となつてカリフォルニア州一帯に燃え広がつたのである。

大阪の商業上の仲間や後援者は失望嘲笑

商益を捨て、入信して耶蘇になるだけなら兎も角、伝道者になつてまで転身した貞吉に、大阪の商業上の

なつていたため、伝道者として立つたとき相手の陶醉を誘うような、眞の伝道を誤るようなことがないよう、六〇日間人との交流を絶つて祈祷と聖書によつて神と向き合い、確信を得るまで自分に叩きを入れてゐる。以後、貞吉の生涯は、伝道者として揺らぐことも妥協することもなかつた。

信仰復興 (Revivals of Religion) と純福音運動の中で

貞吉が求道者となり受洗した十九世紀末期の米国は大覚醒運動の余韻が残つていた頃である。リバイバルとは「再び生きる」という宗教上の荘重な言葉だが、日本のカタカナ辞典には、先ず古い映画の再上映とか、昔の歌謡曲の再上演のあとに、小さく載つてゐるだけなので、日本語訳の「信仰復興」を使うことにする。

「あなたは、生きてゐるとされてゐるが、実は死んでゐる」という聖書の言葉どおり、既存教会の靈的低迷状態からの脱却を意味する覚醒運動である。物質的繁栄と安定による人間過信もあれば、靈的指導者の欠如と教会の自己防衛の場合もあり、運動は多様性を帯びてゐる。広義にはルーテルも信仰復興の使徒である。

貞吉は聖書を神の言として信じる主義を取り、それ

後援者は失望し、発狂したのかと嘲笑し誤解した人もあつた。

しかし農村出身の貞吉には、広いカリフォルニア州一帯の日本からの農業移民や出稼ぎ人の心の不安と渴きを誰よりも知つてゐた。伝道を自分への神の召命と感じていたのである。

二五年十月から西海岸のオレゴンからワシントン州カナダの一部へも入り、また東へアイダホ、ワイオミング各州に散在する同胞に伝道の旅をつづけ、同胞の教化に全霊を捧げた。

珍田サンフランシスコ領事は貞吉の労苦に於いて、六大鉄道会社の特別優待乗車券を貸し与えてこれに報いたことでも、貞吉への深い信頼を感じさせる。

下層階級、社会的弱者へ献身の伝道

サンフランシスコの牧師の頃とは違い、移動伝道の対象は下層階級の人達が多い。村落や島はもとより、売春婦と悪漢伝道、刑務所伝道にも果敢に入つてゐた。戸別の飛び込み伝道は当たり前で、停車場や、床屋で待つ間にも待合い客に福音を語つた。日本人と白人の割り合ひは七・三の割りで、階層、職業、年齢など特に選ぶこともなかつた。

貞吉の日記的自伝を読むと、淡々とした筆致で綴られた、熱情とも時に壮絶ともとれる米国西海岸伝道には驚嘆のほかなく、編者として筆力不足を嘆くのみである。

信仰に覚醒した貞吉が、過去の同胞相手に商売で得た儲けを宣教に使うことになんの躊躇もなかった。

貞吉は教会にあつての牧師よりも自分への特別の召命が「遍く郷村を巡りて福音を伝ふべき」伝道者として心得、メソジスト教会には牧師の職務はあつても、伝道者の職務が無いことから退会し、斯くして自由を得たのである。

その頃貞吉は、松江で宣教しているB・バックストン著の「イエスは来る」にいたく心を打たれ、その再臨思想に傾倒する。

(再臨とは、神が、イエスにおいて始めた宣教・死・復活による地上に展開中の救いの業を、イエスを再臨させて完成し、神の國が到来する)

#### 祖国日本伝道の召命を受ける

「明治二十七年一月初め、或る日静かに祷告を続け主を待ち望みおろし時「往け」との御声明らかに自分の衷に深く響き渡り、実に一驚を喫したりき。数年前伝道の召しを受けた時には多額の金を所有しおりし者が、

#### 笹尾鐵三郎との本州・四国伝道とB・バックストン

河邊貞吉・笹尾鐵三郎の二人は、これから二年間、相携えて本州・四国の町々村々で未信者に広く福音を伝えた。東京・東北・関西・四国・中国・大阪そして最終伝道地を伊賀上野と決めていた。

就中、貞吉はこの伝道中の明治二十八年四月、松江に定住していた、かのバックストンから招きがあつた。先に貞吉が在米時代に傾倒していたバックストンは、ケンブリッジ大学在学中に伝道者となることを決意し、一八九〇年(明治二十三年)に來日して松江に定住し、山陰地方の伝道に当たるとともに、彼のもとに集まつた青年達を指導して、主唱する「純福音運動」を始動させていたのである。

貞吉は、敬愛するバックストン師と親しく信仰上の問答を重ねることができた。

米国西海岸に起こつた信仰復興運動を体験して帰朝した河邊、笹尾ほか数名が加わり、後に教理を同じくする東京の中田重治が主宰する東洋宣教会と呼応し、「信仰復興による純福音運動」は明治後期から大正期に日本の基督教界にセンセーションを起こした。また、再臨運動で教理を接する内村鑑三・木村清松らとも歩

一切を主に捧げ主の御用の為に費やし尽くして斯く貧しくなりし事(中略)金欲に満たされ、むさぼり蓄えたりし守銭奴なる自分を斯く改造し給ひし主を衷心より崇む。(中略)太平洋上を歩ませても必ず往かしめ給う事を堅く信ず。」

貞吉のかなり悲痛な心境と情況が察しられる。

ところが、出発も間近くなつて、シャツル、カリフォルニア、ポートルランドの人から日本への旅費・伝道費の支援申し出に驚く。婦日は神の堅い意志と知り、「この時主の御名を崇むることしきり」と富に替わる恩寵を告白している。

#### 外地で伝道者となり、日本へ逆上陸の例は稀少

日本の農村出身の独学青年が、大阪、米国で商人としての成功を得て、外地で初めて神を知り、傑出した伝道者として外地での体験を背に帰朝し、逆上陸して生涯を捧げる身となつた人は少ない。

ここで、奇しくも貞吉と志を同じくしてシャツルで伝道していた者が居た。笹尾鐵三郎である。

日本行きの使命を体感していた笹尾と、明治二十七年二月十一日、サンフランシスコを出発しホルル経由で三月十九日横浜港に安着した。

#### 調を合わせることになる。

本州四国伝道も終盤となり明治二十七年六月、最終直前の大阪でのことである。

街の会堂、寄席、空家などを借りて、多くの人達に福音は伝わり、求道者・決心者も起こつてきた。或る時、天王寺西門鳥居前の餅市という名の昼間参詣者に餅を売る広い家を、十日間夜間だけ借りて福音を伝えていたが、近くの仏教学校の教師生徒等が講話の妨害を始め「耶穌と坊主の喧嘩」だと評判になり、毎夕早くから群衆が集まるようになった。貞吉は主が与え給ひし好機と信じ、求道者を、離れ座敷に招いて求道者を催していた。しかし妨害者等は悪漢に酒を飲ませて餅市の店破りを始め、隣の料理屋に居合わせた私服刑事が止めに入ったが治まらず、刑事は悪漢の親分を連れてきて漸く治め、刑事と親分に守られて大手町の東部メソジスト教会に引き揚げた。途中まだ悪漢等が烈しく追い駆けてきて危険に陥つた者もあつた。

この事が縁になつて、殺人犯で入獄していたけれども基督教を聞き素行が一変し、仮出獄の恩典に与つていた元親分が、所有の理髪店を週一回休みの日に開放してくれた。週一回の説教会がついに其処に講義所を

設けることになり、この働きを見た東部メソジスト教会のW・E・タウン師が多方面から浄財を集めて支援者となり、その後は後盾となつて貞吉の伝道を助けることになる。

この騒動がなかつたら淡路伝道はあつただらうか。  
伊賀路伝道そして結婚から淡路へ

明治二十九年七月、本州・四国伝道の最終地伊賀上野を目指して、大阪を出発し徒歩で郡山・奈良・柳生その他の町村を、昼は戸ごことにトラクト(宗教政治上の小冊子・パンフレット)を配付し、夜は路傍で福音を伝えつつ、いよいよ伊賀上野に入った。

ここには、聖公会伊賀上野教会の永田保治郎牧師が待つていた。貞吉の大阪商人時代の刎頸の友と言えは思い出す読者もおられるかと思う。その永田が牧界入りしていたのである。そして貞吉の滞在中に永田の義妹と縁談が起る。貞吉はこれを聖旨と受けとめ、目出度く中山柳子と十一月十五日にこの教会で挙式し、河邊貞吉・柳子夫妻が誕生した。同時に保治郎と貞吉の義兄弟も生まれたわけだ。当日の費用を式円で賄つたのは、笹尾鐵三郎からの式拾円の送金が間に合わなかつたからである。貞吉は、

「凡ての結婚の費用を辨じ御恵に依り少しの負債もせずして目出度式を終りし事は深く感謝する處なりき」と残している。きつと川魚など捕つてきて、加葉御飯など炊いて、楽しく祝われたことだろう。

河邊のオジイサンとオバアサンを思い出しながら、本稿を編集中に千里山会員の方々から、

『オバアチャンは、貞吉さんがアメリカから向こうの人連れて還つてきはつたんでしよう?』とか、  
『オバアチャンは、ハーフの方でしよう?』

とか訊かれまして、筆者も半分そのようなあやふやな記憶でしたから、ここに拾割訂正させていただきます。

結婚式が終わると貞吉は永田と二人で伊賀全土を戸毎訪問伝道したとあり、凄まじい二人の熱意を感じる。

貞吉は永田と別れて、笹尾からの送金を資金に淡路島伝道の下見に向きます。これは大阪南の伝道のときに、悪漢と闘いながら伝道していたのに心打たれた前掲のタウン師が、これからの貞吉の開拓伝道の地を、近畿・四国・中国の接点であり、基督教の白地地帯に等しい淡路島の町村に使命を見出そうとして支援を申し出ていたからです。

貞吉が、カリフォルニアの日本人移民を中心に貧し

い農民相手の伝道の大成功を、日本の淡路島でトライするのになんの抵抗もなかつたと思われます。日本での本格伝道を浸透しやすい都市中心の伝道よりも、自分の郷里に似た、海に近い農漁村中心の淡路島に求めた気概を窺うことができます。

最初に居を定めたのは志築(しづき)でした。南北に長い島の真ん中に近い大阪湾に面した小さな漁港です。明治二十九年十一月十八日、淡路での最初の日曜礼拝は貞吉柳子も含めて五名の会衆から始まりました。戸別訪問、路傍伝道はもとより、島内を草鞋脚絆で木賃宿を点々としながら六ヶ月、村々町々の一進一退の伝道の生活は続きました。その頃、貞吉のサンフランシスコ時代の教友であつた日本人Kが、フリーメソジスト外国伝道局より宣教師として派遣され、志築に貞吉を訪ね、共に淡路伝道の共働者として伝道局に届け、Kは福良で伝道を開始する。しかし数ヶ月経つても不振が続きその厳しさから、後事を貞吉に懇願し福良を去つて行く。当時の福良の伝道事情から放置できないため、タウン師に了解を得た上、志築を去つて居を福良に移し、志築は兼務の地とする。その年の、

明治三〇年七月二十九日、柳子安産、男子誕生

#### 命名 満甕

生涯をして生命の水を周囲にある渴ける悩める人々に運ぶ器即ち伝道者たらしめ給わん事を篤く祈りし後、心に浮かびはりしは、「水を甕に満たせよ」の聖句なり。

福良伝道の至難の一端は、次の貞吉の記録にある。

此頃は集會に来る者少なき故専ら路傍にて福音を伝ふ。殊に町にある数ヶ所の湯屋前を最上の教壇として福音を伝ふ。又近在の阿萬、阿那賀、湊、賀集、志知、沼島等の村々に出張して福音を伝ふ。其当時淡路は祭禮多き処にて、祭禮には村々の人が群集する時とて、村々の人に廣く福音を伝ふる最も好き機會なれば、祭禮には何れの処にも出張し、當時に於いては珍しき楽器なりしアッコードアン(手風琴)を以て人々を集め、短き説教をなしてはトラクトや雑書を配付せり。(中略)常に祈りし事は、伝わりし御言葉が敵に啄み去らるる事なく、多くの果を結はしめ給はん事なりき。

当時の幼い満甕の記憶に次のようなものがある。

母は淡路の方々を私を連れ回り、行く先々で日曜学校をし、父と一緒に路傍伝道をやつて、村のお祭りには、母が歌い父が説教をし、私とその間に立たされるといったようなことが度々ございました。石が飛んできたことも覚えていますが

フリーメソジスト外国伝道局は、自ら派遣した宣教師

のKの早期離脱で、現地でKが後事を頼んだ貞吉にまでは支援を控え、継続を打ち切ってきた。淡路伝道は、あまたの障害迫害も乗り越え、全島を巡って伝道に勤しんだ話や記録を本稿では紹介し尽くせない。初めて経験する島の夫婦生活の試練は、まずまず二人を強くしたであろうが、ここで柳子の出自と淡路での生活の一端を満蹊の後日譚でご紹介します。

明治7年、若狭の小浜の生まれ、立教大学高等女子部3回生。在学中に受洗。淡路島日本橋を通じて貞吉を支え、教会のいろいろな仕事もよくいたしました。明るく率直で竹を割ったような性格、正直と善意の人でした。

声量のあるハイソプラノでしたから、福良で銭湯に連れて行ってもらった時など、誰

とも愉快地大きな声で話す屈託のない人でした。田舎でも女性には当時はハイカラな白いレース編みを教えたり、英語クラスを始めて村の青年に教えたり、母の周囲にはよく人が集まり、父のバイブルクラスを上回ることも度々でした。初



明治36年 第5回内国博覧会場 基督教連合伝道館

等科の生徒に大内兵衛や永田秀次郎(後の東京市長、前掲の保治郎とは無関係)も居ました。(後略) どうも雰囲気や容貌が、日本人離れされてましたからよく外人に間違えられたようです。

#### 大都市大阪の中心に教会と学校を

日本へ支援を打ち切っていたフリーメソジストの米国伝道局は、貞吉の働きを伝え聞いて驚き、急速日本伝道の再開を決めて、二組の米人宣教師夫妻を送って来ることになった。貞吉はこれに添えて海峡を越えて明石、神戸へと伝道を本格化し、大阪市伝道の開始と修養生達の学舎の確保を目指します。

明治三六年、時恰も新世界で第五回内国勸業博覧会が開催され、一〇〇万人の大阪市に五三〇万人来会の盛況ぶり、会場正面に基督教連合伝道館が設置され、連日伝道会が開かれた。これには教理が近い東洋宣教会の田重治らも東京から参加した。貞吉はこの機を逃さず、多くの参会者カードのうち大阪市南部に住む人達への

訪問伝道を繰り返して多くの信者を賜り明治三六年(一九〇四年)玉水橋南詰に大阪集会所の開設に成功した。(これが現在の大阪日本橋教会の基となった)

貞吉が日本フリーメソジストの祖とも父とも言われるのはここに由来する。貞吉らの働きが拡大するにつれて、フリーメソジスト教会の宣教地で記録的な伝道成果を更新する日本(大阪)での緊急の課題は、これを支えていく同労者の育成であった。

最初に下寺町に、貞吉夫妻が住み込みの伝道館、といっても二軒つづきの日本家を借り、境界をなくして片方に貞吉夫妻、もう片方の一階(土間)が教場、二階が修養生数人の宿舎、教師の住居も襖・障子をはずしたら何にでも早変わり、こうして一九〇四年に呱呱の声を上げたのが「下寺町伝道館」である。

翌三八年、天王寺区悲田院町に中古の西洋館を手に入れることができた。宣教師も修養生も住めるまさに学館である。晴れて「大阪伝道学館」と名づけた。

教師 河邊貞吉、堀内文吉、

宣教師 マチューソン、ヤングレン各夫妻

修養生 男子四、女子二 計六名

(これが、後の自由メソジスト神学校、現在の大阪キリスト



天王寺区悲田院町 中古の西洋館に大阪伝道学館  
左端 河邊柳子 その右 河邊貞吉 宣教師と修養生達

教学院の基となった(二〇〇五年二〇〇周年)

明治三六年に集会所、同三七年に伝道館を相次いで起こしたこの二年は、貞吉夫妻にとつて最大のエポックとなった時期である。

貞吉四〇歳、柳子三〇歳であった。

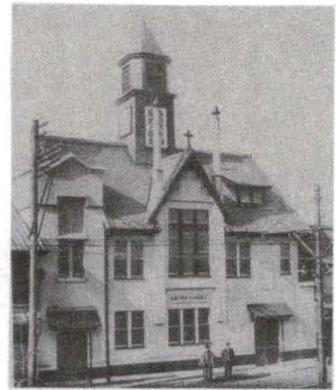
### 大都市大阪の中心、庶民の街に大教会出現

これからの壮年期は、大阪に腰を据え、まっしぐらに日本の大伝道者として歩みつづけられます。貞吉には不変の一伝道者意識のほかにはなにもありません。日露戦争も戦捷のうちに終わり、翌三十九年一月九日待望の女子誕生、この子には、恩寵溢れんばかりにと、命名 溢子。

日本に、欧米先進各国は基督教精神による大学から幼稚園までの学校創設を支援しましたが、大阪伝道学館のように基督教だけの単科学校は珍しく、さらに存続となると創業者精神がよほど強固なものでないと持ちこたえられません。これも偏に貞吉の伝道者精神によるもので、働き手を創り育てることの外は眼中になかったからと言えます。

貞吉の日本橋教会における布教は、大正期には日本の基督教会で第一級の会衆を擁する大教会となりました。日曜礼拝は三〇〇人を超え、九ヶ所の日曜学校には教師五〇余名、生徒は約六〇〇名を数える全国でも屈指の大教会となった。

これが、知識階級や中産階級の居住地ではなく、大都市の中心、それも下町庶民の日本橋一丁目での快挙



1915年(大4)1月2日  
大阪自由メソジスト教会  
献堂記念写真

には驚きのほかなく、在米時代の伝道の主たる対象がそこにあつたればこそその成功でした。

米国から在米日本人伝道を懇請される

大正九年末、米国自由メソジスト伝道局から、米国に居る日本人に伝道するよう招かれて、翌十年三月に夫人同伴で渡米の途についた。

十一ヶ月間の米国内伝道は数百回におよび、これには米国留学中の長男満甕も同道して奉仕された。

三万哩を旅し白人・日本人併せて数万人相手に熱誠を尽くして伝道し、癒されるもの、浄められるもの、救われるもの、復興されたもの、また途中献身されるものも多く起こした。

この旅で、大阪伝道学館のため多額の献金も与えられた。学院百年史には二万七千圓の記録がある。千圓

と千圓で家作が一軒買えた時代を思うと、心強い学館へのお土産となった。自由メソジストの総会にも出席し、大正十一年一月末帰国している。

この年、学館は自由メソジスト神学校の名称となり、改めて開校している。

大正十二年に貞吉は最初の日本の総部長に選ばれた。

教会と学館という伝道の柱は貞吉の長年の労苦が報いられ、大正期に大阪南のみならず大阪市の代表的基督教伝道拠点に成長していたのである。

しかし好事魔多し、この年の十二月末、心ない狂人による放火に遭い教会堂が全焼した。貞吉夫妻の努力と信徒達の涙ぐましい協力により、二年後の十四年十一月再建落成を見ることができたのであった。

このように、波瀾万丈の大正期ではあったが、お終いの頃には、河邊家になよりの福音がもたらされた。旧知昵懇の同志、牧師林寛治郎・チエノの長女順子



アメリカ伝道  
大正10年8月シアトル

と長男満甕との縁談整い、これが日本橋教会の会堂再建第一号の結婚式となったことである。

満甕は福良に生まれ、父母に付いて大阪へ、日本橋時代は今宮中学から関西学院文学部に進み大正八年卒業後渡米、グリーンビル・カレッジからドルー神学校に学び、渡英してエジンバラ、オックスフォード両大学

で研鑽を積んだ。そしてエルサレムのアメリカ東洋研究所員となり、W・F・オルブライト博士の指導を受けて帰国し母校の教職に就いた。牧師の子息が牧師になるための勉強には、英米では特別の取扱いがあつたとしても、貞吉

にとつて日本伝道のあとを継いで貰うため、もう一つ教会を建てるほどの教育投資の気持ち伝わってくる気がする。

林家は、大正十二年から、大正中期に大阪北部に新しく造成をはじめた千里山住宅に住み、順子は母校のブルル女学校に奉職する傍ら、翌十三年から自宅で、弟妹とともにささやかな日曜学校を主宰していた。

満甕は西宮の父母のところを出て順子の居る千里山に移り新所帯を構える。順子は実家の日曜学校は続け、満甕は千里山から関西学院に通う。

貞吉が還暦を迎えられたのは大正十三年、人生五〇年の時代から思えば、六〇歳は今の七五歳から八〇歳の感覚だ。しかし昭和に入っても貞吉はなお矍鑠として教会と学館のために尽くすのである。

教会の名は自由メソジスト第一教会、自由メソジスト神学校長は後継者の土山鐵次に任せ、自らは一教師となつて支えていた。

一九二九年（昭和四年）のブラックマンデー、ニューヨークに端を発した世界大恐慌の大波は日本にも及び長い不況に入った。外国のミッシェンからの支援も細り、従来から補助の有無は教会の活力の強弱に通じていたから、この際敢然と自給独立の時期に入るのは当然のことと伝道に一層の拍車がかかった。

昭和六年、教会牧師も辞して名誉牧師となり、巡回牧師すなわち伝道者に還つて全国行脚を再開し、自らの教派よりむしろ他教派や、工場、会社、学校等に説教と講演をして回つた。嘗て、貞吉の副牧師をしていた大屋左一は次ぎのように語っている。

え、かつてのように禁教高札を再び出すことはできなかったが、度を越した嫌がらせと事実上の弾圧は行われた。

敗戦という目にみえない巨大な外圧は、約七〇年振りにもう一度基督教の解禁をもたらしたが、八〇歳を過ぎた老いたる貞吉にとつて、昭和はどのように映つたことであろう。福音のほかはなにも語らなかつた人に我々は知る由もない。

貞吉の人生を今回初めて垣間見て、日本に、それも千里山にこのような人が実在されていたことに、不思議な気がするのである。

心血を注がれた大阪伝道学館は今大阪キリスト教学院として健在である。創り育てられたのは貞吉に違いないのだが、校長だとか理事長とかの名前は窺えず、終生教師として後継者に委ねて一伝道師に還つている。自由メソジスト大阪日本橋教会を国内最大級の信徒を有する教会として築き、自由メソジストの父祖とも言われたが、後継者に委ねて無役の名誉牧師になり終生一伝道師として全国を回っている。

特筆しておきたいのは、貞吉の移動伝道は若年の時代から晩年に至るまで、その日数より常に説教の回数

「神は約束されたように、先生の腹から、活ける水が川のように絶えず流れ続けさせて、その栄光をあらわされたのである」と結んでいる。

千里山に居を移され、柳子とともに晩年を送られることになるが、七〇歳を超えてなお貞吉の全国伝道は老いの一微を感じさせるがごとくまだまだ続く。

しかし昭和六年の満州事変から5・15、2・26両事件を経て、昭和十二年の支那事変へと日本の迫る道は反欧米列強へと突き進んで往く。独伊との三国同盟から遂に米英への宣戦布告、一年を待たずして戦況悪化、軍部と政府は主力産業を統制下に置くために「日本」の名を冠した大合併企業が輩出したが、基督教までもプロテスタントの全教派を「日本」基督教団に一本化して管理統制下に置かれた。神国日本を標榜する軍部・政府にとつて基督教は目障りとなつていた。しかし同盟国のイタリアはカトリックの総本山があり、ドイツはプロテスタント発祥の国である手前、敵国宗教とは言えなかつたが、これらの国が次々と劣勢にまみれてくると、基督教は英米の敵国宗教と露骨な呼ばわれ方をされるようになった。明治憲法は一応信教の自由を認めていたため、神国日本に反する宗教とはい

がはるかに多いことで、これは一日に何回も移動して説教を行っているからである

貞吉は元来教派にとらわれる人ではない。アメリカでのメソジストは英会話の勉強のために門をくぐつたのであり、日本へ帰つてからの自由メソジストも責任者から肩代わりを頼まれたのが縁で、アメリカ時代から教派にとらわれない節がみられる。

貞吉の周りにどうして多くの人達が集まるのか。

それは知的関心に傾いた日本の基督教から見落とされた部分に照準を合わせて、知識でも教養でもない、祈りと伝道により、信仰覚醒による信仰復興を広く大阪の庶民の間に純福音として説いたからにはかならず日本の宣教の先駆者、伝道の巨人と言われ、今日なお貞吉が活きている所以である。

貞吉が九〇歳で召天する五年前の昭和二三年に、長年日曜学校だけだった河邊家の家の中に、教団や教派に囚われない千里山で初めての基督教会が発足した。

それは貞吉が明治初年に九州の田舎から提げて出てきたあの杓が実り、蠟が灯つたかのように思える。

満甕が昭和二四年カナダ留学の折り、失明の身で日曜礼拝の説教を務められたと聞く。

貞吉の戦後の数年は、内孫には敬虔の下にそれぞれトリニティーの三をつけた二人と、近くに住むようになった溢子の嫁した医師菱川侃一との間の外孫達にも囲まれて平穏で幸せな晩年を送られたと思う。



貞吉の信仰に対する神の恩寵ではなかるうか。  
昭和二八年一月、九〇歳をもって召天なされた。

満甕・順子夫妻が、この岩盤の上に家の教会を創られ、そしてシオンの丘に昭和三三年ナオミ幼稚園開園に続き基督教諸事業を展開され、昭和三七年四月、新しい教会堂建立、今日も単立の千里山のコミュニティ・チャーチとして、輝きを増している。

柳子夫人は貞吉に代わり、これらを見届けられて、信徒の人達や、住宅の方々に親しまれ愛されながら、

昭和三九年十一月、八九歳をもって召天なされた。  
東京オリンピックが終わって直ぐの頃である。(了)



河邊貞吉記念 単立千里山基督教会